

研究ノート

中日文化の「集落化」と「再集落化」について

—— 日本の通信教育の原点から語る ——

方 蘭

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

Tribalization and Retribalization of Culture in China and Japan:
From the Origin of Distance Education in Japan

FANG Lan

Abstract: By sharing common cultural affinities, Japanese people have carried out distance education through the questions and answers of letters from long ago. We can see that people from different ages and different areas can get together for the sake of common cultural interests and form primitive cultural tribalization. Chinese and Japanese have gone through tribalization and retribalization several times in their cultural history. This thesis aims to offer a new viewpoint on the research of Chinese people and culture by studying the tribalization and retribalization, of these two countries, and propose some new perspectives on developing cultural trends based on the Internet.

Key word: Chinese Culture, Japanese Culture, Tribalization, Retribalization

〇. はじめに

日本の通信教育の原点に関して、海原徹の『近世私塾の研究』による「安永年間（一七七二—一八〇）にまとめられた諸種の質問状への本居宣長の回答、すなわち「答問録」^{註1}をみると、ほとんど開塾直後から通信教育の行われていたことがわかる^{註2}と書かれた。¹ また、国文学の賀茂真淵と本居宣長は生涯において直接対面したのは松阪の一夜限りだったが、以後手紙のやり取りで師弟として学問の継承、発展に寄与したそうである。²

なぜ昔のような交通未発達環境の中で、人々が遠く離れていても、手紙という遅い通信手段を通して、教育活動及び交流をしなければならなかったか。その背景に『源氏物語』や『万葉集』などのすばらしい文化に魅力さ

れ、或いは、本居宣長という人物の鋭い講釈に感心し、人々が年齢、時間や距離を越えて、一つのこの文化を愛好する「集落」になっていたのではないかと推測する。更に、一つの文化への追求から他の文化への追求もありうると考え、人々がこれらの違う文化へ追求の中で、別の人と他の「集落」になっていく。このような現象を、本稿では文化の「集落化」と定義しておく。また、文化の発展につれて、何か一つ統一の文化が現れて、前の一部の個別の「集落」の文化が解消されたら場合、このような過程は「解集落化」と言ってもいいだろう。現在のインターネットの発達による情報の氾濫の中で、「解集落化」現象は多くの分野で日々起こっているが、同時に新しい文化もその中で創出され、文化の「再集落化」という現象も続々と現れている。

一. 文化の「集落化」とは

『スーパー大辞林』3.0によれば、「集落」とは

- ①人が集まって生活している所。人家が集まっている所。村落。
- ②地理学で、人間の住居の形態。家屋だけではなく耕地なども含む。また、村落のみならず広義には都市をも含む。
- ③バクテリアが固体培養基の上に作った集団。コロニー。

このような「集落」に今まで含まれた意味は二つあると思われる。一つは、地理的に人々が集まって生活していく所であること。もう一つは、微生物や人の集まりである。

このような意味の特徴を文化という分野に置き換えてみると、前にも述べたように、日本の通信教育の原点は少数の『源氏物語』や『万葉集』の愛好者の共同体であり、むしろ彼らが手紙のような通信教育まで苦勞して追求していた文化は、他と違う愛好を持っていた人々の目から見ても、「異邦人」と差別化されたかもしれない。彼らは地理的に集まって一緒に生活していく共同体ではなく、同じ文化に魅了され、心理的に集まって一緒に交流し、同じことについて考えていく共同体であろう。本稿では、このような人々による文化の「集落化」という意味を、現在のインターネットによる世界規模の繋がりが可能になった現在まで持ち込み、文化の「集落化」という広い意味での各分野での文化の「再集落化」という革命が常に起きていることを提示し、二十一世紀の新しい文化の研究視野に、この文化の「集落化」と「再集落化」を頭に入れておく必要があると思う。

二. 中国文化の「集落化」と「再集落化」

1. 中国文化について

中国文化は他の言い方もいくつかある。(黄 2005)によると、中華文化は、また華夏文化、中国伝統文化、中国文化と言ってもよい。その文化は中国と華人地区存在する文化体系を指す。その特徴は「儒家文化」と「天朝上国」の思想である。³

中国の歴史学者周非が「中国文化」に「中国伝統文化」及び近代西洋文化の影響を受けて生まれた「中国現代文化」(中華民国大陸時期文化と中華人民共和国文化)が両方含まれていると指摘し、前の学者の錢穆、柏楊などの「中国文化」と「中国伝統文化」を同等にする観点に反対し、現代の「中国文化」の中で起こった変化を無視して、単なる「中国伝統文化」と西洋文化とを比較することは中国の事実を尊重していないと指摘した。³ 本稿は、周非学者の観点に基づいて、中国文化の「集落化」と「再集落化」を考えていきたい。⁴

2. 中国文化の「集落化」と「再集落化」の歴史

比較文明論の研究者である染谷臣道の見解による文化と文明の違いは、「私は、「文明」とは「文化・政治・経済・社会の複合」という総合概念であるとはっきり謳ったらよいのではないかと考えています。このように定義することで「文明」と「文化」の違いを明らかにすることができます。」⁵ つまり、文化は文明に属していることである。また、「文明は「だれもが参加できる普遍的なもの・合理的なもの・機能的なもの」をさすのに対し、文化はむしろ不合理なものであり、特定の集団(たとえば民族)においてのみ通用する特殊なもので、他に及ぼしがたい。つまりは普遍的でない」。⁶ このような違いを理解した上で中国の文化の「集落化」と「最集落化」の歴史を振り返ってみよう。

中国文化の起源は黄河流域の中原地区から始まり、東夷、南蛮、西戎、北狄の四つの外族の文化との融合の中で、漢民族の農耕文化が優位に立ち、最初の「華夏文明」(中華文明)が誕生した。⁷ つまり、中国文化の最初は漢民族の農耕文化の「集落化」として形成された。その後、何千年の歴史の中で、遊牧民族は華夏文明の誕生した地域を占領したかったため、華夏文化という漢民族の農耕文化の「集落化」も何度も他民族の文化と西域文化の影響を受けて、最終的に農耕文化という大事な食文化に+他民族の食文化という多彩

な食文化の「再集落化」が中国の長い歴史の中で生き残った。

また、漢民族の代表的な「儒家文化」も中国の各時代の統治階級にうまく利用され、中国のような民族文化が多く存在する国を統一していく際の国宝文化として、中国の多くの王朝の皇帝ができるだけ「儒教文化」を中国の広い範囲で宣伝し、より多くの人々をこの「再集落化」に加入してもらうように努力した。

ただし、中華人民共和国が成立してから、中国のリーダー層がマクス・列寧主義による共産主義文化で最初の中国伝統文化を変えようとしたが、最終的に何千年も続いてきた「儒家文化」（その後中国伝統文化）が勝ち抜き、中国のリーダー層も前の主張を放棄し、中国文化への回帰という方向へ発展してきた。

1978年の改革開放政策による中国の市場経済の発展の中で、生産力などに強い西洋文明のいろいろな文化が中国伝統文化に大きく影響したが、中国の人々が生産力と生活レベルを高めていく中で、西洋の利己主義、暴力、利益中心などの偏った文化が中国の一部の若い人々に悪い影響を与えたため、政府も、中国の国民もやはり何千年も続いた中国伝統文化の「孝文化」と「仁、義、礼、智、信」などの社会を安定させ、人々に安心感を持たせる中国伝統文化の精粹を強めていく必要があると考えた。つまり、中国の「儒家文化」は西洋文化の衝撃を受けた後の中国文化の「最集落化」でもある。

特に、現代のように通信技術が発達し、ますます国際化していく中国では、政府が昔のように単純に「他民族文化との融合」と「中国伝統文化」のすばらしさを主張していても、現在の人々が既にネットを通じて、各自の心に選んだ「自分の中国文化」が存在することは否定できない。中国の社会状況が大きく変わらなければ、将来の中国文化は、すばらしい国際人として活躍できる中国人たちによって創られ、より多くの中国人が影響され、新しい中国文化の「再集落化」はまた起きるだろう。

3. 分析

以上に述べたように、長い歴史の中で、中国文化の「集落化」と「再集落化」が続いてきた。中国文化は現在まで世界でもっとも古くから続いてきた文化の一つにもなっている。このような文化は、また「華夏の農耕文化」、「儒家文化」と「漢字文化」などとも言われ、中国の国内の漢民族以外の民族文

化に影響しただけでなく、他のアジアの国の人々まで、日本人、朝鮮人、琉球人、ベトナム人などにも影響した。彼らが中国文化に影響されながら、自分たちの文化でも創り、歴史の中で各自の文化の「集落化」と「最集落化」が続いていた。中国文化の他国へ影響は、政治意識、思想宗教、教育、生活などいろいろな方面に及んでいる。⁸

しかし、現在の中国文化のこれからを考えていく時、国際化と情報通信技術の発達につれて、今までと逆に、他国への文化輸出は少なくなり、他国からの文化の輸入が盛んになっていくのではないかと推測する。なぜかと言うと、長い歴史の中で、中国文化はいつも国の中で各影響による文化の「集落化」と「再集落化」が続いてきた。「郷に入っては郷に従え」^{注3}という諺のように、今後、多様多彩な外国文化と接触する中で、他国の文化に対し、吸収・取捨選択し、中国文化の足りないところも再認識し、より良い中国文化を創るために、より謙虚な姿勢で他国の素晴らしい文化を中国文化に取り入れ、文化の革命による中国文化の「再集落化」が形成していくと信じるからである。

三 日本文化の「集落化」と「最集落化」

1. 日本文化とは

日本文化を特徴的に示す概念として、「和（わ）」という言葉がしばしば用いられる（例：和語、和文、和歌、和服、和食、和風旅館など）。「和」は古くから日本を示す言葉で、漢（中国）や洋（西欧）など外国からの事物に対比して使われる。また「大和（やまと）」という言葉が使われる場合もある（例：大和言葉、大和魂、大和撫子、大和絵など）。「大和」は本来、奈良地方を指すが、同時に日本全体を示す古い言葉でもある。日本文化も様々な要素を含んでおり、古代から中世に至っては中国を中心としたアジアの近隣諸国、そして明治以降の近～現代では欧米からの影響を受け、吸収・取捨選択を繰り返し、様々な手が加えられて独特な展開を遂げている。¹¹

このように、日本文化は常に矛盾した二面性を持っていると言えよう。それは他国文化へのすばやい吸収性と自国文化への強い独立性であると思う。

2. 日本文化の「集落化」と「最集落化」の歴史

日本文化は最初から移民文化であった。考古学や人類学の研究によると、北方からの日本列島の最初の原始住民及び中国大陸からの移民、南方沿海の

移民など朝鮮を渡って日本に住み始めてから 日本の旧石器文化、縄文文化、弥生文化が始まったと言われている。日本はもともと母系社会だったが、日本の外来人口の移住により、新しい文化が持ち込まれ、東京都文京区弥生町で新しく発見された日本の縄文模様と違う模様や日本にももとなかった農耕技術など、日本の先住民はそれらの文化を自分たちの文化にうまく取り入れ、男系社会になるとともに、自分たちの文化も発展させたのだろう。⁹ つまり、日本文化の最初は移住してきた人々は日本の先住民に様々な文化を持ち込み、また、日本先住民の漁業文化に同化され、日本文化の最初の「集落化」が形成された。

その後、航海技術の発展により日本は中国に遣隋使、遣唐使を派遣し、中国の先進な漢字文化、仏教文化など学び、それらをうまく取り入れ、日本人の和文化及び宗教の並存文化も創った。特に、中世の武士政権の中で、現在よく言われている鎌倉文化、室町文化など、日本の武士文化の独立性がよく発達し、現代になってよく言われた日本文化の代表はこの時代には多くあった。¹⁰

近世、近代、現代になって、日本文化に初めて西洋文化に触れ、外来語、天ぷらなどの飲食物が日本に伝わったほか、日本の政権がキリスト教の勢力に警戒心を持ち、キリスト教宣教師たちを日本から追放し、禁教などの鎖国の道を選んだ。外国と隔絶された日本は、長い平和の中で、再び独自の文化を発達させた。日本の独自の教育文化（寺子屋や藩校）が誕生し、庶民の芸術文化、娯楽文化も発展していた。この時期は、西洋との交流は厳しく制限されたが、長崎の出島からオランダとの貿易を通じて、日本文化に洋学や蘭学（医学）、漢方医学が発達、日本の多国医学を融合した医学文化の「集落化」も形成した。

また、幕末の開国、明治維新を経て、欧米の文物・制度を取り入れ、日本の近代化を図ることが国家目標になった。大正時代頃には進学率の上昇などを背景に、都市を中心に洋風の文化が次第に浸透し、デパートに代表される消費文化、大衆文化が成立した。昭和 culture は日本の「軍国主義」による日中戦争や第二次世界大戦への参戦などで、日本は深刻な食糧難と物資不足に見舞われ、大衆文化や伝統文化も政府に統制された。その厳しい状況の中で、日本がポツダム宣言を受け入れ、アメリカ軍を主体とする連合軍に占領され、日本の大半はGHQの管轄下におかれた。戦後はアメリカの近代文化が

国民の憧れとなり、高度経済成長により日本は飛躍的な工業化と都市化を遂げた。¹¹ アメリカ文化による日本文化の「解集落化」が起こり、日本人の従来の漁業文化と移民文化から伝わった農耕文化とアメリカから学んだ工業、法律文化などによって、文化成熟期に近い近代の日本文化の「再集落化」がまた形成された。

3. 分析

日本の伝統文化は、神道を基軸として、外来の文化を取り込みながら、時代とともに変遷してきたが、表面的に大きく変化していても、その中に一貫する極めて日本的な要素や傾向も残っている（例：住居が和風の座敷から洋間にも変わっても、室内に靴を脱いで上がる点では変わらない）。¹¹ また、日本では常に外来の文化により、日本文化の「集落化」と「再集落化」が発生し続けていた。

しかし、現在の日本文化のこれからを考えていく時、国際化と情報通信技術の発達につれて、今までと逆に、他国からの文化輸入は少なくなり、他国への文化輸出が盛んになっていくのではないかと推測される。なぜかと言うと、日本は現在中国であまり保存されなかった唐の時代の文化を日本の和文化に持ち込み、また、アメリカやヨーロッパなどと相当な生活レベルと技術力ももっているため、特に他国から学ばなければならない文化は現在あまりはっきりしていないからである。更に、他国の人から見れば、神秘的、また西洋人が憧れる「侍文化」、「祭り文化」など、漫画やアニメ、ゲーム、映画などの情報通信メディアで、他国へ宣伝していける可能性も十分にあるからである。¹² このような文化の輸出によって、今までと違って日本国内だけでなく、世界規模範囲で、日本文化の「再集落化」が起きるかもしれない。

四. 中日文化の「集落化」と「再集落化」の比較

これまで述べた中日文化の「集落化」と「再集落化」を比較してみると、共通な点は以下のようなものである。

1. 中国文化も日本文化もその文化の発祥地を中心とする地域からあまり遠く離れたことはなかった。
2. 両国の文化にどちらも外来の文化と融合し、他文化を同化していく過程があった。

3. 両国の文化にどちらも西洋の文化に影響され、それらの文化による自分たちの文化の「再集落化」があった。

しかし、中日文化の「集落化」と「再集落化」の相違点もある。

1. 中国文化は今まで「儒家文化」と「天朝上国」の思想が強く、外来文化への発信と影響が強く強調していた。日本文化は今まで外来文化を積極的に受け、吸収・取捨選択を繰り返し、その中で様々な手が加えられて独特な展開をする姿勢は強く強調していた。
2. 現代になって、中国文化は今までと逆に国際化と情報通信技術の発達につれて、外来文化への包容力が強くなり、今後の国民個人による自己選択の「中国文化」の自由度が高くなっていく傾向がある。日本文化は現代化につれて、今まで積極的に受け、吸収・取捨選択を繰り返す姿と変わって、独自の手を加えて展開し、蓄積した文化をどのように世界の他国への発信と影響していくかは課題になっている。

五. おわりに

本稿では、日本の通信教育の原点は昔の人々が古い通信手段を使って、同じ愛好した文化への執念で、年齢、時間や距離を越えて、一つの文化を愛好する「集落化」という史的な事実から語り、中日文化の長い歴史の中での「集落化」と「再集落化」について議論し、比較してみた。

この研究の意味は、中日文化の発展の中にある大きな特徴と今後の発展の傾向を分析してみることによって、中日の各分野での文化比較研究に一つの新しい情報通信による見方を提供し、中日文化の発展の方向も今までと違っていこうと考えるところにあると思う。

もちろん、時間の制限や個人の考え方に限界があるため、中日文化の発展の特徴としての広い意味での「集落化」と「再集落化」についてしか議論できなかったので、今後の課題は、まだまだたくさん残っていると思う。中国と日本だけではなく、他の国はどのような文化の「集落化」と「再集落化」が経っていたか、人間社会のこのような文化の「集落化」と「再集落化」が長い歴史の中で常に起こるのは、根本的な原因は何なのか、文化の「集落化」と「再集落化」の行き着く先は、いったいどこにあるかなどについて、まだはっきりした答えはないが、それらがもし分かったら、人々が創っていく文化の「集落化」は、将来より面白く、より多くの人々を幸福に感じさせる方向へ向かっていくであろう。

注

¹ 『本居宜長全集』第一卷所収

² 安永六年（一七七七）冬蓬萊雅楽より二問と答、小篠道沖より六問と答、栗田土満より一問と答がもっと早い。なお、これらの人々が正式入門したのは、もう少しになってから『本居宜長全集』第一卷五二一―三頁

³ 『童子教』の「郷に入りては而ち郷に随い、俗に入りては而ち俗に随う」から

参考文献

- 1 海原徹、(1983.6.1)『近世私塾の研究』、思文閣出版、ISBN4-7842-0747-3 C3021 (日本語)
- 2 原雅子、(2005.10.28)、「賀茂真淵と本居宜長の学問」、千里金蘭大学紀要・短期大学部 36, 33-41, 2005-10-28 (日本語)
- 3 黄俊杰、(2005)、『中华文化的发展』、国立台湾大学出版、ISBN:9860002800 (繁体中文)
- 4 钱穆、(1999.12.29)、『中国文化史导论』、商务印书馆、ISBN 7-100-01659-2/G·233 (简体中文)
- 5 伊東俊太郎(監修)、吉沢五郎(編集)、染谷臣道(編集)、(2003.11)、『文明間の対話に向けて―共生の比較文明学』、世界思想社、ISBN-10: 4790710327、ISBN-13: 978-4790710325 (日本語)
- 6 司馬遼太郎、(1989.4.25)、『アメリカ素描(新潮文庫)』、新潮社;改版、ISBN-10: 4101152365、ISBN-13: 978-410115236 (日本語)
- 7 柳诒徵、(2001)、『中国文化史』、上海古籍出版社、ISBN : 9787543934256 (简体中文)
- 8 岡島昭浩、「漢字文化圏とは」、『2004-2005年度大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書 台湾における日本文学・国語学の新たな可能性』所収。(日本語)
- 9 山田康弘、(2015)、『つくられた縄文時代：日本文化の原像を探る』、新潮社、ISBN9784106037788 (日本語)
- 10 宮本常一著；田村善次郎編、(2014)、『日本文化の形成』、農山漁村文化協会、講義一、ISBN9784540131462、講義二、ISBN9784540131479
- 11 神崎宣武、白幡洋三郎、井上章一、(2016)、『日本文化事典』、丸善出版、ISBN9784621089798 (日本語)
- 12 威尔·杜兰特 (Will Durant)、(1972)、『世界文明史』之四一中国で远东 (Our Oriental Heritage : The Far East)、幼獅文化编译、1935 出版、1972 初版。ISBN 957-530-608-2 (中文 (台湾))。